

秋田県におけるアメリカズグロカモメの観察記録

佐々木 均¹・佐々木あさ子¹・浜谷武雄²・浜谷まり子²・杉元明日子³

1. 〒013-0038 秋田県横手市前郷一番町1-21
2. 〒018-1721 秋田県南秋田郡五城目町七倉16-12
3. 〒010-0961 秋田県秋田市八橋イサノ2-2-21-202

はじめに

アメリカズグロカモメ *Larus pipixcan* はカナダ南部およびアメリカ合衆国北部の内陸部で繁殖し、北アメリカ南部および南アメリカの太平洋岸で越冬する(園部 1996, 桐原ほか 2000)。

日本では1984年 1月 8日に京都市北区の賀茂川でユリカモメ *Larus ridibundus* の群れに混じっていた 1羽がはじめて発見、撮影され、同31日にはみられなくなったという(野鳥編集部 1984, 日本鳥類保護連盟 1988, 日本野鳥の会 1989, 叶内ほか 1998, 真木・大西 2000)。また、2回目の記録は1988年 9月の愛知県矢作川河口への飛来とされている(氏原・氏原 1992, 園部 1996, 真木・大西 2000)。その後、1988年11月23日に秋田県南秋田郡天王町江川の八郎潟旧水路で、進藤繁氏がユリカモメの群れに混じっていた本種 1羽を発見し、石川寿一氏が撮影した写真により、日本野鳥の会野鳥記録委員会はこれを国内 3回目の記録として認めた(日本野鳥の会野鳥記録委員会 1989, 日本野鳥の会 1989, 日本野鳥の会秋田県支部 1990, 1999, 氏原・氏原 1992)。また、1991年 9月28日に富山県黒部市黒部川河口で(日本野鳥の会野鳥記録検討会 1994)、2000年11月16日と28日に大阪南港野鳥園で(大阪南港野鳥園ホームページ)、さらに神奈川県(日本野鳥の会神奈川支部ホームページ)でも記録があるとされるが、いずれも詳細は不明である。

このように国内における本種の観察例は複数あるものの、いずれも論文として発表されていないため、日本鳥類目録改訂第 6版(日本鳥学会 2000)では本種を検討中の種として扱っており、観察記録の論文発表が待たれている。

筆者らは2005年 8月28日に、秋田県潟上市と男鹿市の境界にある船越水道において本種の成鳥 1羽を発見、同年11月28日まで継続的に観察し、その行動や形態ならびに換羽の進行状況などについて知見を得たのでここに報告する。

観察地および観察方法

本種を発見した場所は図 1の c、潟上市の天王漁港(39° 53' 50"N, 139° 57' 40"E)(以下、漁港)

2007年 3月22日 受理

キーワード : 秋田県, アメリカズグロカモメ, *Larus pipixcan*

4

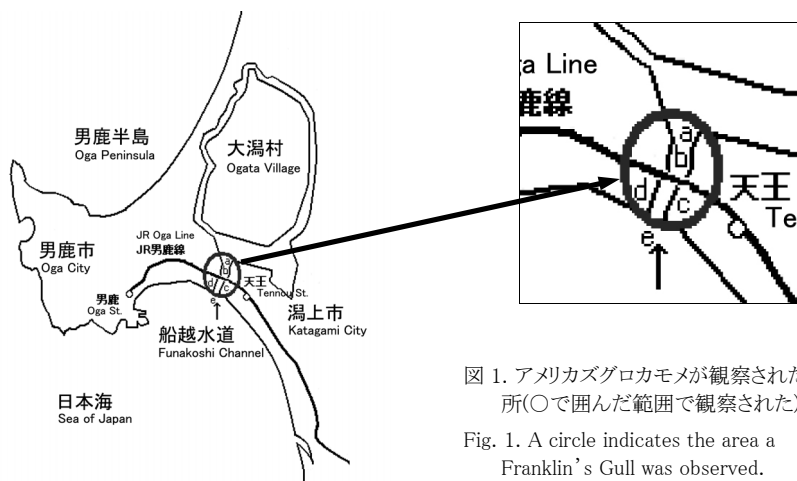


図 1. アメリカズグロカモメが観察された場所(○で囲んだ範囲で観察された)

Fig. 1. A circle indicates the area a Franklin's Gull was observed.

で、ここは男鹿半島の付け根に位置する八郎潟と日本海を結ぶ船越水道の左岸にあたり、日本海に注ぐ河口(図 1の e)から上流へ約1200mの地点にある小規模な漁港である。この漁港から同水道の上流側に県道 104号線の八竜橋とJR男鹿線の鉄橋(図 1の b)があり、さらにその上流の防潮水門(以下、水門)(図 1の a)で八郎潟調整池に接しており、漁港から水門までの距離は約 700m である。船越水道の両岸は集落となっており、さらにその外側にはおもに水田が広がっている。

潟上市は2005年 3月に旧南秋田郡天王町・飯田川町・昭和町の 3町が合併して設立されたもので、この漁港は旧天王町にあり、1988年11月にアメリカズグロカモメが発見された地点から北西へ 2km程離れた場所である。

筆者らは、発見日の2005年 8月28日から終認日の11月28日まで継続的に観察を行なった。この期間の観察日数はのべで45日であり、観察とあわせてできるだけ写真とビデオによる撮影を試みた。また、終認日以降から12月上旬にかけてはほぼ 2日に一度の頻度で現地にてかけ、探索を続けた。

結果および考察

この期間における観察結果の概要は付表 1にまとめて示したが、ここでは本個体の行動、外部形態、換羽について述べる。

1. 行動

8月28日 9:45頃、漁港の防波堤にとまっていた頭部の黒い小形カモメ類 1羽を発見し、望遠鏡(20~60倍)をもちいて細部を観察したところ、後述のようなアメリカズグロカモメと思われる特徴の個体(以下、本個体)を確認した。



図 2. 天王漁港で観察されたアメリカズグロカモメ。
(2005年 8月28日 佐々木均撮影 左側はウミネコ
コ)。

Fig. 2. Franklin's Gull (right) with a Black-tailed Gull
at Tennou Fishing Port (Photo : Hitoshi Sasaki,
August 28 2005).



図 3. トンボ類を捕食するアメリカズグロカモメ
(2005年10月 9日 浜谷まり子撮影)。

Fig. 3. Franklin's Gull capturing a dragonfly
(Photo : Mariko Hamatani, October 9
2005).

発見時、この防波堤にはウミネコ *Larus crassirostris* が数十羽とオオセグロカモメ *L. schistisagus* の成鳥 1羽が休息しており、本個体はこれらの群れの外側にあたる防波堤の端にとまっていた。近くにトビ *Milvus migrans* やミサゴ *Pandion haliaetus* が飛来すると、頭部を高く持ち上げて警戒する姿勢をとった。

その後数羽のウミネコが飛び立ち、その直後に本個体も飛び立って単独で船越水道の上流方向へ向かい、水門付近で旋回して高度を上げ、その後見失った。飛翔は規則的なはばたきで直線的に進み、ユリカモメのように体が上下するような飛び方とは異なっていた。

正午頃、防波堤にとまっていたウミネコやユリカモメの混群の中に本個体を再び発見した(図 2)。ウミネコが歩いて接近するとそれを避けるように、歩いてやや距離をとることがあった。近くのウミネコやユリカモメが飛び立ち、それとほぼ同時に本個体も飛び立ったため見失ったが、再び同地点へ戻って来たことを確認した。

本個体は 8月29日～9月 1日にも漁港に出現した。この期間は、早朝に防波堤へ飛来して短時間滞在した後に飛び去り、その後同地に再び飛来した。8月30日には、漁港付近を飛びまわり空中で小形の甲虫類をくちばしで捕えたが落としてしまい、すぐその甲虫を空中で再びくわえるという採食行動を観察した。このような行動は本種の採食習性として「昆虫を空中で捕獲することもある」という園部(1996)の記載に合致する。9月 1日には船越水道中央部の水面で水浴びし、その後は漁港の防波堤に飛来した。

翌 9月 2日は、早朝に漁港の防波堤へ飛来したがすぐに飛去し(土方 私信)、その日は18:00の時点でも漁港に戻ってこなかった(伊藤 私信)。

その後しばらく本個体の目撃情報は得られなかったが、9月18日午前には漁港で再び発見したとの情報が寄せられた。これを受け、9月20日に観察を再開した。行動は防波堤上ですわって眠っていることが多く、ときおり羽繕いを行っていた。その後、この場所からいったん姿を消したが再び現れ、夕方に防波堤の外側に降りた後に見失った。翌9月21日以降もこの個体は確認されたが、漁港の防波堤には早朝の短時間しか滞在せず、ユリカモメやウミネコとともに漁港より上流の鉄橋をおもな休息場所にするようになった。また、水門のすぐ下流にある工所用鉄柵で休むこともあった。休息の合間に、ときおり水面に降りて魚を捕えるところや短時間水面に浮かぶ姿も観察された。水門より上流側の八郎潟調整池方向や水道河口方向に飛去することもあり、徐々に行動圏が広がってきているようだった。

10月からはほとんど漁港には寄りつかなくなり、船越水道右岸側の船越漁港(図1のd)の波消しブロック上やJR男鹿線の鉄橋で休息することが多くなった。10月9日には、鉄橋で休息中に、近くに飛んできたトンボ類 *Sympetrum sp.* をくちばしで捕える行動をみせた(図3)。また、移動時には単独行動をとり、船越水道の河口から水門上流までの広い範囲を移動していた。しばらくこのような状況が続いたが、11月28日の観察を最後にこの個体は観察できなくなった。

2. 外部形態

これまでの観察と撮影した写真、ビデオにより明らかになった本個体の外部形態は次のとおりであった。

8月28日発見時の観察では、本個体はユリカモメよりわずかに小形にみえ、特に胴長がユリカモメより短かった。またユリカモメに比べて頭部がやや大きく、くちばしが太く短いため全体的にずんぐりした体形で、ふしよは普通のユリカモメよりやや短く細かった。

くちばしは上嘴、下嘴ともに先端から約4分の1は赤色で、基部側約4分の3は黒色であり、口内および舌は鮮紅色であった。足はこの時期の一般的なユリカモメより黒っぽい暗紅色であった。

頭部は黒色で、この時期のユリカモメ夏羽のような褐色味はまったくなかった。頭部の黒色部の範囲は後頭部まで続いており、この点はユリカモメのそれとは異なり、ズグロカモメ *Larus saundersi* のそれに似ていた。

くちばしの基部から額・頭頂にかけては白色の羽毛が混じっており、成鳥夏羽から冬羽に換羽中であると考えられた。眼の上下は白色の羽毛によってそれぞれ三日月形に縁取られており、この白色部の幅はユリカモメに比べ太かった。眼色については全体が黒色にみえたが、虹彩の色が暗色なのか外部から虹彩が見えていないのか確認できなかった。

頸・胸・腹・脇・腿・下腹・下尾筒・腰・上尾筒・尾羽は白色であり、胸から腹にかけてはわずかに紅色味を帯びていた。



図 4. 翼上げ伸びをするアメリカズグロカモメ(2005年8月28日 佐々木均撮影).

Fig. 4. Franklin's Gull stretching its wings (Photo : Hitoshi Sasaki, August 28 2005).



図 5. 飛翔するアメリカズグロカモメ(2005年11月20日 佐々木均撮影).

Fig. 5. Franklin's Gull in flight (Photo : Hitoshi Sasaki, November 20 2005)

背・肩羽・小雨覆・中雨覆・大雨覆はウミネコ成鳥とほぼ同じ程度の濃さの灰色だと思われた。翼上面の大部分も同様の灰色であり、次列風切と初列風切 P 1~6の先端部分は白く、翼後縁に幅広い白色帯を形成していた。初列風切のうち P 7~10の4枚は先端部に黒色部があり、その内側は白色であった。また、少なくとも P10の最先端と P 9の最先端前縁部は白色であったが摩滅が激しいため、本来の羽色のパターンはわからなかった。翼裏面は、P 7~10の先端部分の黒色を除いて白色であった(図 4)。このような翼の羽色はアメリカズグロカモメ成鳥の特徴に一致しており(National Geographic Society 1999)、夏羽で頭部が黒くなる類似種のユリカモメ、ズグロカモメ、ボナパルトカモメ *Larus philadelphia*、ゴビズキンカモメ *L. relictus*、ワライカモメ *L. atricilla*、チャガシラカモメ *L. brunicephalus* などとは異なっていた。

3. 換羽

本種は年 2回の完全換羽をすることが知られている(氏原・氏原 1992)。頭部の黒色部分については、発見した 8月28日の状態は既述のとおりであり、9月20日には頭部からくちばし付け根付近の白色部がやや多くなっていた。その後、頭部の白色部は少しずつ広がっていったが、終認日の11月28日の時点でも、頬から頭頂や後頭部の黒色部はまだ残っていた。

また、観察期間における初列風切の換羽の進行状況は下記のとおりである。8月28日の時点では P 7~10は旧羽で、先端部の摩滅が激しかった。9月22日に撮影した写真では、旧羽は P 9と P10が残っており、P 1~6が新羽、P 7が伸長中であった。10月2日には、旧羽は P10のみとなり、P 7は P 6とほぼ同じ長さまで伸びていた。10月13日にはすべての旧羽が抜け落ち、翼をたたんだときは外側から P 7の先端がみえるようになった。10月17日には P 8が外側からみえるようになり、P 9もはえてきた。11月20日に撮影した写真では、伸長中である P10の外側羽縁の黒色線が確認でき(図 5)、11

月24日にはP10がP 9とほぼ同じ長さにまで伸びていた。この段階で初列風切の換羽と新羽の伸長はほぼ完了したとみられる。

日本における本種の記録は少ないが、今回の観察例は秋田県で2回目となる。しかも既述のとおり1回目と今回で出現した地点は直線距離で2km程であり、同一地域へ繰り返し飛来したことは興味深い。本種が越冬する本来の場所は日本から遠く離れているが、繁殖地から南下する際にごく少数が北アメリカ西岸から日本に迷行することもあり得ると考えられ、太平洋側、日本海側ともに飛来の可能性がある。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり、貴重な情報をお知らせくださった石川寿一、加藤正敏、菊地直基、後藤恭子、佐藤公生、佐藤穎、佐藤正生、西出隆、船橋功氏をはじめとする日本野鳥の会秋田県支部の皆様、同会盛岡支部の四ッ家孝司氏、宮城県仙台市の伊藤達史氏、日本野鳥の会宮城県支部長竹丸勝朗氏、同会山形県支部の真木広造氏にお礼申し上げます。また、本個体がアメリカズグロカモメであると確認してくださった氏原巨雄氏、氏原道昭氏にも厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 叶内拓哉・安部直哉・上田秀雄. 1998. 山溪ハンディ図鑑7 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京.
- 桐原政志・山形則男・吉野俊幸. 2000. 日本の鳥550水辺の鳥. 文一総合出版, 東京.
- 真木広造・大西敏一. 2000. 日本の野鳥590. 平凡社, 東京.
- National Geographic Society. 1999. Field Guide to the Birds of North America. Washington. D.C.
- 日本鳥類保護連盟. 1988. 鳥630図鑑新装版. 日本鳥類保護連盟, 東京.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 東京.
- 日本野鳥の会. 1989. フィールドガイド日本の野鳥増補版. 財団法人日本野鳥の会, 東京.
- 日本野鳥の会秋田県支部. 1990. 秋田県産鳥類目録. 日本野鳥の会秋田県支部, 秋田.
- 日本野鳥の会秋田県支部. 1999. 秋田県産鳥類目録. 探鳥あきた 41: 55-109.
- 日本野鳥の会神奈川支部ホームページ. <http://www.mmjp.or.jp/wbsj-k/bird-moku/kanagawa/tori-moku-No5.html>
- 日本野鳥の会野鳥記録委員会. 1989. 野鳥情報1989.1-1989.8. Strix 8: 347-349.
- 日本野鳥の会野鳥記録検討会. 1994. 野鳥情報・観察記録1993.7-1994.7. Strix13: 265-274.
- 大阪南港野鳥園. ホームページ http://www.osaka-nankou-bird-sanctuary.com/o.n.b.s_web/deta/list.htm
- 園部浩一郎. 1996. アメリカズグロカモメ. 日本動物百科第3巻鳥類 I :118. 平凡社, 東京.
- 氏原巨雄・氏原道昭. 1992. カモメ識別ガイド. 文一総合出版, 東京.
- 氏原巨雄・氏原道昭. 2000. カモメ識別ハンドブック. 文一総合出版, 東京.
- 野鳥編集部. 1984. 日本初記録ー古都に飛来フランクリンカモメ. 野鳥452: 1.

The record of Franklin's Gull for Akita Prefecture, northern Japan

Hitoshi Sasaki¹, Asako Sasaki¹, Takeo Hamatani², Mariko Hamatani² & Asuko Sugimoto³

1. 1-21 Maegouchiban-Cho, Yokote-city, Akita 013-0038, Japan

2. 16-12 Nanakura, Gojome-Machi, Minamiakita-Gun, Akita 018-1721, Japan

3. 2-2-21-202 Yabaseisano, Akita-city, Akita 010-0961, Japan

We observed an adult Franklin's Gull *Larus pipixcan* from 28 August to 28 November 2005 at the estuary of the Funakoshi Channel that runs along the border of Katagami City and Oga City, Akita Prefecture, northern Japan. The gull was molting from summer plumage to winter plumage.

The species has been sighted in the past in a few areas of Japan (e.g. Kyoto, Aichi, Toyama and Osaka). This is the second observation record in Akita Prefecture and the first report to a scientific journal in Japan.

Key words: Akita Prefecture, Franklin's Gull, *Larus pipixcan*

付表 1. 船越水道におけるアメリカズグロカモメの観察概要(2005年).

Appendix 1. Observation summary of a Franklin's Gull at the estuary of the Funakoshi Channel (2005).

観察日 Date	時刻 Time	場所 Location	観察事項 Observed fact
8月28日 28-Aug.	9:45	c	防波堤で休息している成鳥が初めて観察された(図 2, 4). An adult Franklin's Gull was first observed on a breakwater (Figs. 2 and 3).
8月30日 30-Aug.	15:00	c	飛翔中に甲虫を捕らえた. The gull caught a beetle while flying.
9月 1日 1-Sep.	10:20	c	水面で水浴後, 防波堤に飛来して羽づくろい. ウミネコ幼鳥から攻撃された. The gull preened on a breakwater after bathing. While preening, it was attacked by a juvenile Black-tailed Gull.
9月 2日 2-Sep.	5:40	c	探鳥に訪れた観察者の情報によると, 防波堤に飛来したが, 間もなく飛去したとのこと. According to visiting birders, the gull came flying and landed on a breakwater but flew away soon.
9月18日 18-Sep.	午前 in the morning	c	探鳥に訪れた観察者が再び発見した. A visiting birder detected the gull again.
9月20日 20-Sep.	8:50	c	防波堤で発見された. The gull was observed on a breakwater.
9月21日 21-Sep.	15:45	c→e	防波堤で休んでいたが, カラスに追われたため, ユリカモメとともに河口方向へ飛去. Crows chased away the gull resting on a breakwater and it flew away towards the estuary with Black-headed Gulls .
9月22日 22-Sep.	12:20	a	水門下の杭にとまる. The gull perched on the top of a stake at the foot of the water gate.
9月25日 25-Sep.	16:40	a→e	水門工事現場のワイヤーで休息していたが, 水道河口方向へ飛去. The gull took a rest on a cable in the construction site of the water gate, and flew away towards the estuary.
9月27日 27-Sep.	16:45	e	波消しブロックで休息. The gull took a rest on a tetrapod.

付表 1 の続き.

10月 9日			鉄橋でユリカモメの群れとともに休息.
	14:00	b	The gull took a rest on a railroad bridge with a flock of Black-headed Gulls.
9-Oct.			
10月31日			オイルフェンス上で休息したり, 水面で浮遊物を食したりしていた.
	12:00	a	The gull took a rest on an oil fence and ate floating matter on the surface of the water.
31-Oct.			
11月12日			波消しブロックでユリカモメの群れとともに休息.
	12:00	d	The gull took a rest on a tetrapod with a flock of Black-headed Gulls.
12-Nov.			
11月20日			鉄橋から防潮水門間を繰り返し往復して飛翔(図5).
	10:00	a~b	The gull made repeated flights between a railroad bridge and the water gate (Fig. 5).
20-Nov.			
11月21日			水道河口部の干潟で寝ていた.
	13:45	e	The gull was sleeping on the mud flat of the estuary.
21-Nov.			
11月24日			波消しブロックで休息.
	9:40	d	The gull took a rest on a tetrapod.
24-Nov.			
11月28日			水道河口部のブイにとまっているのが観察され, これが終認となった.
	14:00	e	The gull was observed on a buoy in the estuary for the last time.
28-Nov.			

観察場所は図 1 のアルファベットに対応している.

a: 船越水道防潮水門. b: JR 男鹿線鉄橋. c: 潟上市天王漁港. d: 男鹿市船越漁港. e: 船越水道河口.

Alphabets indicate the corresponding locations in Fig. 1.

a : The water gate of the Funakoshi Channel. b : A railroad bridge of the Oga line. c : Tennou Fishing Port. d : Funakoshi Fishing Port. e : The estuary of the Funakoshi Channel

